

1月5日「受肉？何それ、美味しいの？」イザヤ書40：25~31、ヨハネ福音書1：14~18

新年の喜びのなかで皆さまと礼拝できることを心から嬉しく思います。今日は「公現日礼拝」です。ギリシア語では「エピファニア」と呼ばれ、「輝き出る」「顕現」という意味です。この日は真理の光が輝き出た日、全世界すべての人にキリストの輝きが及ぶようになった日、と位置付けられ、特に遠い東の国から3人の学者たちがやってきた日ということになっています。日本的には25日が終わってしまうとすっかりクリスマスはお終いのイメージですが、教会の暦では、1月6日の公現日までが降誕節、クリスマスシーズンとなっています。先日、ある方から質問を受けましたが『信徒の友 12月号』では、海外にキリスト教を伝えに出て行った宣教師の働きにスポットが当たっています。それはクリスマスの最後の日がこの公現日として、世界中の人にキリストが知らされたことを祝う日だからです。私たちの教会でもクリスマスに海外出身の方々に賛美を奉げて頂きましたが、この時期に、キリストは世界中すべての人のために来られたことを改めて思い起こすことはふさわしいことだと思います。

さて、そんな今日、選ばれています聖書のテキストはヨハネ福音書の1章でした。ヨハネ福音書は少し変わっていて、詩（ポエム）からスタートします。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。」

世界を造り上げた神の言葉は、光として私たちに照らし、私たちに命をもたらすキリストであることを歌います。そして今日のテキストはその「言葉」であったキリストがついに人の姿をまとって私たちと同じ姿で来られたことを伝えるのです。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

この、神の言葉であったキリストが人の姿をとられたことを、キリスト教では「受肉」と呼び、大切な事柄としてきました。「受肉」・・・何だか美味しそうですね。でも、言葉が肉を纏う、なんてちょっと変な感じもし

ます。どうしてこんな形式ばった言葉にされ大切にされているのか。少し、説明的になりますが、これは私たちの信仰の根幹に関わるのでお話しします。

皆さんはイエスをどの様に信じているのでしょうか？これは実は結構難しい問題です。たとえば、ここにいる全員でイエスの似顔絵を描いたとしましょう。全く一致する似顔絵は出来ないと思います。皆、それぞれで思い描くイエス像が異なるからです。私たちが唯一の聖典だと信じる聖書でさえ、4つも福音書があり、それぞれのイエスの描き方は異なっています。つまり、私たちは同じ神を信じていると言いながら、その信仰の在り方はかなり多様に富んでいるということです。本来そういった多様性は、喜ぶべきものです。神さまは私たちを全く異なるように創られたのですから、違って当然です。ところが、この「違い」も行き過ぎると祝福すべきこととして安易には喜べなくなる場合があります。

たとえばあまりに信じる事柄がバラバラ過ぎると一緒に歩むことが難しくなります。キリスト教は最初はイスラエル周辺のほんの少しの集まりだったのが、世界中に言葉や民族の壁を越えて広がっていきます。そうすると、それぞれの文化や風土の違いのなかでそれぞれの形で受容されていきますから、本来の形が変質してしまうこともありました。例を挙げるならば長崎県の「隠れキリシタン」は世界遺産となったことで一気に脚光を浴びました。江戸時代 300 年間も幕府の迫害に負けず信仰を貫き通した人たちがいた、最初は驚きと感動をもってヨーロッパのキリスト教世界に伝えられましたが、その後 300 年間も宣教師や神学教育を受けた牧師の教えなど無しで引き継がれたので、その信仰はキリスト教信仰と呼べるものか、相当怪しかったとも言われています。その信仰を受け継いでいた人たちは、もはやキリスト教的な用語であるとも分からないままじないのよう伝えていたようです。

また、「カルト」と言う言葉を聞いたことがあると思いますが、イエスの教えを利用して、人を騙してお金や権力を集めたり、傷付けたりする者たちもいます。聖書の言葉のもつ力強さを、悪用しようとする者も残念ながら存在するのが人間の現実です。ですので、ある程度キリスト教が広ま

った時点で、キリスト教の信仰とは何か？何が正典で正しい教えとは何か、そういった「教義」が整えられる必要が出てきたのです。その過程で、私たちが今手にしている聖書が定められ、毎週唱えている使徒信条が産み出されていったのです。

その使徒信条のなかで、「受肉」の教義を語るのはこんな部分です。「主は聖霊によりて宿り、おとめマリアより生まれ、ポンテオピラトのもとに苦しみを受け、死にて葬られ・・・」つまり、イエスが、受肉したというのは、イエスは確かに私たちと同じ人間となり、十字架の上で苦しまれた、私たちと同じ苦しみを負うためにこの世界に来られたのだ、ということを表しているのです。なぜ、このようなことを言う必要があるかと言うと、当時の異端的な考えの中には、イエスは聖霊の姿だったので、その肉体も霊的な実態のないものだった。だからイエスの十字架での苦しみはみせかけのもので、実際に苦しまれたわけではない、というものがあつたからです（仮現説）。

神が私たちと同じく無力な人間の姿を取られた、このことはある人達にとっては大きな躓きでした。今日のイザヤ書には私たちが贖われる神のスペシャルな力が伝えられています。「40:28～主は、とこしえにいます神／地の果てに及ぶすべてのものの造り主。倦むことなく、疲れることなく／その英知は究めがたい。疲れた者に力を与え／勢いを失っている者に大きな力を与えられる。若者も倦み、疲れ、勇士もつまずき倒れようが主に望みをおく人は新たな力を得／鷲のように翼を張って上る。」イザヤ書 40 章は、戦争に破れ、祖国から連れ去られた人々に希望の福音を語ります。神さまは必ず解放してくださる。苦しみから救い出してくださる。だから神さまに望みを置いて、苦しい捕囚生活を耐え忍ぼう、そう語られています。実際、50年も続いたバビロン捕囚も解放され、祖国へ帰ることが叶う日もきます！確かにここに伝えられているのは神の一つの側面かと思います。

このような、「スーパー」な神の一側面しか信じない人もいるでしょう。神が弱さを纏った人間になるなんてありえない！と。実際、ユダヤ教とキリスト教は、神が人間になるはずなんてない、というその決定的な1点で、全く異なる宗教となっているのです。けれども、私は思います。実際に救

いを見た者は、それで良いでしょう。バビロン捕囚からの解放に立ち合えた人は「自分たちは救われた良かった！神さまありがとう！」この世界である程度の地位があり、身分が保証され、裕福に暮らす人たちは「神は私たちに恵みをくださった、豊かになれた！嬉しい！」そうなると思います。神さまはスーパーな方で弱さなど感じさせない、それで良いかもしれません。けれども、捕囚は 50 年も続きましたから、解放に立ち合えず、困難に耐えながら、苦しみの中死んでいった者たちも大勢いたはずです。私たちの中にも痛みの中、悲しみの中、この世界で報われたとは到底思えない中、命を落として行った者たちも確かにいるはずです。神はそのような者たちのことは捨て置かれるのでしょうか？数名の選ばれた者たちだけを救いに与らせて満足される方なのでしょうか・・・

そうではない、と思うのです。神は、すべての人を救うことを決意された。そうして、私たち人間と同じ姿を取り、最も苦しい道を歩まれるという仕方で救われたのです。私たちの信じる神さまは神の国でふんぞり返って適当に選んだものだけを救い上げる方、ではなかったのです！私たちに寄り添い、共に生きる道を自ら示される方だったのです。受肉とはそういうことです。イエスが私たちに寄り添って歩まれたこと、私たちの嘆きや痛みや悲しみ、すべての重荷を共に負って下さったこと、最後には私たちの罪を背負って苦しみながら命を捨ててくださったこと、キリスト教の根幹に関わるすべてがこの「受肉」には含まれています。ですから、ヨハネ福音書は、イエスが肉体をもって、私たちと同じ人間となられたことを確かだと、正確に伝えてくれるのです。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

今日は公現日、遠い外国から来た学者たちが、救い主がこともあろうに飼葉おけの中に生まれたことに気付いた日です。学者たちは幼い命の誕生に喜び、持ち物すべてを献げて、喜んで帰っていきました。この方こそ救い主だと信じて。私たちの神は、すべての人の痛みや苦しみに寄り添い、その嘆きを負い、共に生きてくださる方だと示された日です。新しい一年、私たちもこの主に励まされ、またこの主に導かれて歩みたいと願います。